

## 精薄児は幼児とよく似て、漢字の多い文だと喜んで読む

縦の木学園でもそうですが、どこの特殊学校でも、読み書きは、かなを主体にして、漢字はごく僅かしか教えないようにしています。だから、六年生の教科書でも、一年生の教科書ではないかと思うくらい、漢字が少なくてほとんどかな書きです。

ところが、精薄児は、年齢が大きくても、精神は幼児のようなものですから、抽象的なかなには興味が持てなくて、なかなか覚えられないのです。反対に、具体的な意味内容を持つ漢字は、喜んで覚えるばかりでなく、覚えると読みやすいので、漢字の多い文章だと喜んで読むものです。

……私は、このことを縦の木学園の子供たちから教えられました。

花多きは実少なし

口が動けば手が休む

馬の耳に春の風

鳩に三枝の礼あり

雨だれ石を穿<sup>うが</sup>つ

雪の枝叩くも愛の一つなり

高い木は風に折られる

このようなカルタを大阪の幼文社に作ってもらい、これを“縦の木”の子供たちに使って遊んでもらいました。ところが熱中して、一時間ぶっ続けにやっても飽きる様子がないのです。これには私も全く驚かされました。

一般に、知能の低い子供は飽きやすく、一つの事を長く続けて学習させることができない、と言われていています。しかし、漢字を覚えて漢字を読む力がつけば、その力を使って競争するというような適度に知的なゲーム風学習なら、長時間熱中して飽きないものであることを、これまた“縦の木”の子供たちから教えられました。

ところが、幼稚園で漢字教育を排斥する所が多いように、特殊学校では漢字教育などとても無理だと、頭から、そう決め込んでいるのです。